

浄土

monthly JODO

2019
78
July
August

法然上人鑽仰会

貧乏董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー



ガラス器は高さ91ミリ、口径93ミリ。ガラスの厚みは3.5ミリほど。馬（駱駝）の焼き物は高さ46ミリ。ひとつの型で大量に成形され、焼かれたあと、ひとつひとつ彩色されたのだらう、塗りにそれぞれ微妙な違いがある。あまりかわいいたいえない。

この前の大型連休は初っ端から体調を崩して、遠足仲間との遠出の約束が三日ほどずれてしまった。私たちが向かったのは東京からいちばん近い半島の最南端の岬の町である。展望台や海岸の散歩のあと戻った町に、一軒の古道具屋を見つけた。海辺の町によくあるガラス製の浮きや古い漁具などをあつかう土産物店ではない。都市近郊の町にあってもおかしくないようなどこかモダンな匂いもする店である。

写真のデザートグラスはその店で見つけた。とくに珍しいものではないが、つれあいが欲しいというので、店主に値段を聞くとひとつ千円とのことである。ひとつだけ買おうとすると、つれあいはふたつ欲しいと言

う。おいしい、二千円だぜ、まいったな。しかしけち臭いことを旅先（日帰りだけ）で言ってもみっともない。おそらく昭和三十年代の国産のガラス器である。昭和レトロモダンとでもいうのだろうか。ガラスが厚く繊細さに欠けるが状態はいい。

勘定をしようとして、ふと横の机に目をやると、駄菓子屋の球形のガラスの容器に馬（駱駝）かもしれない）の首の焼き物がぎっしりと詰まっているのを見つけた。蓋を開けて数個取り出す。首の付け根に突起があり、何かの栓のようだ。店主に聞いてみると、ウィスキーの栓として使われていたものだろうと言う。底をみるとかろうじて「Made in occupied Japan」の刻印が読める。この連載でもoccupied Japanの表記のある焼き物は一度取り上げた。骨董市で何度もお目にかかっているのだが、これほど大量の同じものが売られているのは初めて見る。たぶん百個近くあるのではないだろうか。どうしてこんなにたくさん同じ物があるのか尋ねると、裏に同じくらいありますよ、たぶんデッドストックが出てきたんでしようとの応えである。値段をたずねると一個五百円。いまの相場からすると高くない。しかし二千円の買い物もある。少し安くならないかと聞いてみる。ダメですとつれない返事が返ってきた。

合計で二千五百円を払って店を出た。

しかし、あの駱駝とも馬ともつかない焼き物が、あの店には二百個近くあるわけである。それこそデッドストックではなからうか。

浄土

2019/7・8月号 目次

お盆の二つの謎.....	藤井正雄	2
法然上人と親鸞聖人②③.....	林田康順	10
連載 微風吹動	名和清隆	16
連載小説 渡辺海旭⑨⑨	前田和男	20
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	27
編集後記		32

表2 貧乏骨董	三宅政吉
---------------	------



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

お盆の
二つの
謎

元・大正大学教授

藤井正雄

浄土
アーカイブス
1996年
7月号

お盆についてよく聞かれることは、まず第一に、お盆のお話しのなかで、目連尊者のお母さんは登場しますが、登場してこないお父さんはどうなっているのでしょうかという質問です。次によく聞かれるのは、お盆のお供えに、キュウリの馬と、ナスの牛のりますが、どっちがお迎えで、どっちがお送りですかという質問です。

目連のお父さんは バラモンで 天に生れていた

お盆の由来は、西晋の三法護訳の『仏教孟蘭盆經』によりますと、次のようにモチーフ別に整理することができます。

- ① この頃、目連尊者は神通力を得ています。
- ② 父母の恩に報いようと思い、神通力をもって世の中のありさまをみつめます。
- ③ 亡ったわが母が餓鬼道に堕ちているのをみます。全身骨と皮になってやせ衰えて、みるからに哀れな姿になっていたのです。
- ④ 驚き悲しんだ目連尊者は、すぐに神通力でご飯を鉢に盛って供養しました。
- ⑤ 母は喜んで食べようとしたが、ご飯はたちまち火炎となって食べることができません。

⑥ 目連尊者は大声で泣き悲しみ、救いをお釈迦さまに求めました。お釈迦さまは、静かに説かれました。

「目連よ、汝の母の犯した罪はあまりにも深く、それに比べて汝の修行の日が浅いので、一人の力ではなんともすることができない。しかし、幸いにも七月十五日の〈僧自恣〉^{そうじし}の日が間近い。その日は雨期にあたって、たくさんのお僧が一堂に集まり、それぞれが過去を反省懺悔して、さらに仏道の修行にいそしもうとする、またの名をへ仏歡喜の日^{ぶつがんぎ}ともいってめでたい日である。この日にたくさんのご馳走を諸仏集僧にお供えして、生みの父母、七世の父母のために苦を抜き、樂を与えてくださるよう回向をたのみなさい。たくさんのお僧が心から唱える回向の功德は広大無限であるから、現在世にある父母は百歳の壽命を保ち、今は亡き七世の父母は餓鬼道から救われるでありますよ」

懇切に亡母の苦しみを除く作法をお釈迦さまは目連尊者にお示しになりました。

⑦ 孟蘭盆会が営まれます。

⑧ 亡母はその功德によつて餓鬼の苦しみより離れ救われます。

⑨ お釈迦さまは、未来においても孝順のために孟蘭盆の供養をささげれば現在の生みの父母、過去七世の父母にその功德は及ぶと教えられます。そして、毎年七月十五日には孟蘭盆会を営むことをすすめます。

⑩ その場に集うお釈迦さまの弟子たちはその教えを聞いて心から喜び、その教えを実践に移したのでした。

以上のように『仏説孟蘭盆經』の全体を一貫して流れているのは父母への孝順で、説供↓抜苦↓報恩をモチーフとしていることが分かります。

ここで、お経のなかに登場する目連尊者がいかにしてお釈迦さまのお弟子になるかの物語を再現してみよう。

いうまでもなくお釈迦さまには、たくさんのお弟子さんがありました。そのなかでも特にすぐれたお弟子さんを十大弟子といいます。目連尊者はそのうちの一人でした。いながらにして世界のできごとを見たり、聞いたり、他人の心を見通すことのできる神通力をもっていましたので、神通第一と称えられた方です。

目連尊者は、お釈迦さまが主に仏法を弘められるために活躍されたマガダ国の首都ラージャグリハ（王舎城）の近く、クリタという村の富裕なバラモンの子として生まれました。一人息子でもありましたので、両親の寵愛を一身にうけて育ちました。幼少の頃から聰明で、ひとり林のなかで考えることの好きな、物静かな子供でした。

隣村の舍利弗とは無二の親友で、あるとき、二人は相携えて出家し、当時の有名な修行者の一人であったサンジャヤの弟子となりました。舍利弗はのちに十大弟子の一人となり、智慧第一と称された人です。まもなく二人は二百五十人の弟子をもつまでになりましたが、コーサラ国の首都シュラーヴァステー（舎衛城）の近くでお釈迦さまの弟子の一人が托鉢する姿に出会いました。出会った僧のあまりにも気高い姿に驚いた二人は、すぐに二百五十人の弟子とともに、お釈迦さまのもとに行き、弟子となったのです。

このように、お釈迦さまの弟子になったばかりの目連尊者の話が『仏説孟蘭盆經』に語られているわけです。

目連尊者の亡き父は、前に述べましたように、バラモンの修道のおかげで天上界に生まれたのに、亡き母はなぜ餓鬼道に堕ちたのでしょうか。業つく婆ははというのに、なぜ業つく爺おやとはあまりいわないのでしょうか。それほど父に比べて母は業が深いのでしょうか。

母の業が深いというのは、欲ばりという意味ではないのです。母はわが子を育てるのに、時には心を鬼にして育てます。育児に専念する尊い母親の姿を見落としてはならないでしょう。それに気づかず、母を忘れ、供養することのなかった目連尊者、お釈迦さまはそれとなく教訓を垂れたものと受け取ることができます。

『孟蘭盆經』は亡き母への恩を「乳哺の恩」、いいかえますと乳を飲ませ育ててくださった恩という形で表現しているのです。

どちらが送り迎えかは 心のもち方に

では、次の質問について考えてみましょう。

お盆のお供えもののなかに、東北地方から関東・中部地方にかけて、茄子や胡瓜で牛馬

をつくって盆棚に供える風習があります。たとえば三河地方では茄子のへたを頭にして、小豆で目、南天の葉で耳、四本の芋殻で足をつくりまします。東北地方では麦わらでつくるのが一般的で、福島の一部では瓜でつくることもあります。

同様に二匹とも馬とする地方、牛と馬とする地方などヴァリエーションがあります。そして一方に精霊が乗り、一方は荷物を乗せるのだといえます。また馬が迎え馬、牛は送り牛とする地方もあります。そして一方に精霊が乗り、一方は荷物を乗せるのだともいえます。また馬が迎え馬、牛は送り牛とする地方もあります。精霊を一刻でも早く迎え入れる気持で迎えは馬、ゆつくりと帰ってもらう気持で送りは牛と解釈する人が多いようです。ところが、逆に迎えは牛、送りは馬と解釈する人も多いのです。それは、お盆の期間をどうとらえるかによって違ってくるのです。

お盆は現在でこそ十三日を盆の入りとし、十五日ないし十六日を送りとしています。もとは旧暦七月を盆月といつて一カ月もの長期にわたるものであったのです。中国では七月一日を開鬼門といつて地獄の門が開き、七月三十日を閉鬼門といつて地獄の門が閉まるという、この一月の間は孤魂、幽鬼がさまようとされていました。恐らくこの中国的世界観の影響があったのでしょう。

長期間にわたる盆月の遺風は今日でも各地に残っています。旧盆は旧暦七月十五日の満月の日を中心にして、七日の日を刻んで民俗行事が営まれてきました。七月一日を盆の開始とする地方は全国的にみられます。七月一日を地獄の釜の蓋があく日というのは、島根

県島根町でもいますが、主として関東、中部地方に伝承されています。その呼称も、千葉県下ですら、たとえば印旛郡米町竜角寺では「釜蓋朔日」、かまふたつにち佐倉市内田や木更津市牛込では「カマノフタノ朔日」といい、安房郡天津小湊町字清澄では「釜フタノ祝イ」といっています。また埼玉県では比企郡都幾川村大字大野、秩父市品沢、浦山、秩父郡大滝村滝之沢では「カマノ口アケ」というよび名もみられます。

七月一日を盆のはじめとするよりも、もつと早く盆ははじめとするところもあります。紀州のゲバナ（夏花）は、四月八日に卯の花をお釈迦さまに供えるといつて、盆の七月十三日まで毎日新しい花ととりかえ続けるとされています。また泉州南部でもタカバナをあげるのは、この卯月八日の地獄の釜のあく日と伝承しているといえます。

七日盆は墓の掃除をするというのは全国的で、墓掃除のほかに仏具みがき、盆棚づくりがなされています。七日盆のあと十二日には草市がたち、十三日は迎え盆、十五日ないし十六日を送り盆とするのが一般的な風習です。

しかし、東北地方では十九日か二十日を送り盆とする地方も少なくないのです。また、奈良県や鳥取県など、三十一日の八朔はっさくの宵や八朔に盆踊り納めをして精霊を送るとするところもあります。

このように、長い期間にわたる盆月の七月一日に精霊が地獄の釜の蓋があいて来るのだから迎えは牛、あまり長く滞在しては迷惑と送りは早く馬と考える解釈もあるのです。

お盆はこのように民俗の上からみますと、先祖の霊に対する人間の複雑な心情が反映さ

れていて興味深いものがあります。かつては正月と初秋望月の一年を二分する季節の折りに先祖の魂祭りが早くから行われていたことは確かでしょう。現在の盆行事は初秋の魂祭りの行事が仏教の盂蘭盆会の行事と習合することによって国民行事にまで結晶したものとみてよいと思います。

お盆の意味を 深くかみしめよう

お盆はふだんの日常生活と打って変わって、生者の世界に一時的に死者の霊を迎えて生者と死者の共存する小宇宙を構成するときです。そこにこそ生者と死者となった先祖の霊との交歓のドラマがさまざまな習俗となつて織りなされているのだといえます。もともと日本人は、この世とあの世とを連続的に同じ生活空間のなかにとらえてきたといえます。

まさにお盆は、先祖の霊を迎えて、一家一族の触れ合い、語らいの格好の場でもあります。盆のひとときを名香を聞き静かに人生に思いをめぐらすことは、ただでさえ忙しい現代人にとって、十分に意義のあることだと思えます。

法然上人 と 親鸞聖人

〔連載二十三〕

望月信亨先生による
ご指摘①

林田 康順

（大正大学教授）

法然上人門下における本覚思想の受容

前号で述べたように、親鸞聖人にとつての極楽浄土は、その存在根拠である阿弥陀仏が法身に由来している以上、その浄土も法土に配当される浄土であつて、そこは「今私が「私」と言っているような私が、私でなくなつた」世界、すなわち、個別性・相対性を滅した世界に他なりません。無論、こうした性質を有する浄土は、すでに多くの宗派で語られてきた浄土の捉え方と軌を一にするものです。なぜ親鸞聖人は『阿弥陀経』に説かれる俱会一処が叶えられる浄土を方便化身土と位置づけるような浄土観へと向かつてしまったのでしょうか。その背景について望月信亨先生は『浄土教概論』第二十一章 総結「他力安心と本覚思想」（『浄土宗選集』第五卷二一五頁～二一七頁）において、広く法然上人門弟の教えを精査の上、次のような指摘をしております。少しづつ紹介して参りましょう。

法然の門下は多士済済であったが、その中にはもと天台の学徒であったものもあり、また当時比叡山に流行しつつあったいわゆる口伝法門を学習し、それに基づいて新義を唱道したものもあり、ために浄土の宗義は異様な方面に向かって発展するに至った。

今でこそ私達は、大正大学・佛教大学といった浄土学を教授する高等教育の場で学び、総本山知恩院・大本山増上寺で開筵される伝宗伝戒道場を経て浄土宗僧侶として養成されていきます。しかし、法然上人は、堅固に覆われた八宗の体制（顕密体制・権門体制）に周囲を張り巡らされる中、たった一人で浄土宗の教えを提唱し、布教伝道に努められました。その苦難は想像を絶するものであったと拝察されます。もちろん、一朝一夕に今のような浄土宗教団ができあがるはずありません。ですから、法然上人ご遷化の後、弟子達の中には、その教学背景と周囲の状況によって法然上人の教えを種々に受けとめる者があらわれてしまったのです。

中にも辛西、証空および親鸞のごときは共に恵心流の本覚法門の説を承け、衆生往生の行修をもつてすべて如来の成就するところとなし、我れらは自ら発心し修行するを要せず、ただ如来の本願成就の謂れを聞き、それを領解すればすなわち往生は了ると説き、これを他力往生と名づけ、しかして法然らのごとく至心信樂して浄土に生ぜんと願じ、多念相続するのをすべて自力の行となし、自力にては眞実報土の往生は不可能だとした。これは疑いもなく本覚思想に立脚し、衆生の行修を迹門始覚の法として排斥したのである。

本覚思想の実態やその捉え方は、時代によっても、研究者によっても、実に多種多様で

すが、その詮要をいえば、文字通り「衆生は本来的に覺つてゐる」という思想であり、『涅槃經』に説かれる「一切衆生悉有仏性——一切衆生に悉く仏性有り」という教えを基底にしつつ、古代から中世にかけて、特に天台宗を中心にさまざまな思想と絡み合いながら成立し（中古天台本覚思想）、比叡山では「山川草木悉皆成仏——山も川も草も木も悉く皆、成仏している」という言葉が一般化するほど、絶対肯定の世界観として展開していきます。こうした本覚思想は、現代に至るまで、仏教の枠に留まらず、日本文化全体に陰に陽に広く影響を及ぼし続けている思想とも言えるでしょう。

そうした中、東京大学の田村芳朗先生は『鎌倉新仏教思想の研究』（平楽寺書店）の中で、本覚思想とは不二絶対（絶対的一元論）の思想であり、そこに各宗派の祖師の教義を順次あてはめていかれる中、法然上人の思想はもともと本覚思想の対極にある而二相對（相對的二元論）の思想であると指摘されました。すなわち、法然上人が提唱された浄土宗の教えは、この穢れた娑婆世界に対して清浄な極楽浄土が西方に実在し、迷い多き私達凡夫に対して慈悲深き阿弥陀仏が厳然としてましまし、その阿弥陀仏が自身の本願の中で難劣なる諸行を選捨てたのに対して勝易なる称名念仏ただ一行を選取されており、だからこそ我々凡夫は聖道門・難行道の教えを浄土往生を遂げるまで聞いて、唯一の救済の教えである浄土門・易行道に帰すという、どこまでも相對的二元論の教えなのです。

伝源信撰の著作に見られる本覚思想

こうした本覚思想の伝統は、比叡山において恵心僧都源信を祖と仰ぐ恵心流と檀那院覚運を祖と仰ぐ檀那流という二流にまとめられますが、望月先生は、その源信に仮託された

と推定される著作の中から次のような一連の説示に注目されます。

源信の作と伝うる『観心略要集』に、「我等一念の心性には無始以来、三身の万徳を備うるなり。蓮華三昧経にいわく、本覚の心法身に帰命するに、常に妙法の心蓮台に住したまう。本来、三身の徳を具足し。三十七尊、心城に住し、普門塵数の諸の三昧、因果を遠離して法然として具す。無辺の徳海、本より円満せり。還りて我れ心の諸仏を頂礼す」（筆者補注『恵心僧都全集』一・二九一）といい、

すなわち「我々の心には、はるかな過去世から法身・報身・応身の三種の仏の徳がすべて具わっており、だからこそ『蓮華三昧経』（日本撰述の偽経典）には、もともと覚っているわが心に帰依すれば、常に蓮台に座することになる。金剛界曼荼羅の成身会のうちに配された三十七もの多くの仏・菩薩等がわが心に住み、あらゆる三昧は因果の道理を離れてそのままに具わり、もとより広大な徳も具わっている。したがって、自身の心にある諸仏に頂礼することが肝要である」というのです。このように、本覚思想は、釈尊が見出され、仏教の根本教義ともいふべき、因果の道理、因縁生起の思想に一定の距離をおいており、これが仏道修行の軽視へとつながっていくと指摘されています。

また同じく『菩提集』に、「とく仏にならんとし、決定して極楽に生ぜんと思ふ者は、我身の中に仏がましますと観じ、あるいは我身即仏なりと思ふべし。我身を離れて外の仏を求むるは仏道を疾く悟る事遙かなり」（筆者補注『恵心僧都全集』五・四三九）といい、

すなわち「一刻も早い成仏を目指して、必ずや極楽浄土に往生したいと願う者がいるが、実は、わが身の中に仏がましますと観想し、あるいは、わが身はそのままで仏であると観

想すべきである。わが身を離れて外の仏を求めてしまうのは、かえって速く悟るということが遙か先のこととなってしまふ」というのです。

同じく『真如觀』にも、「かの土の弥陀如来一切聖衆菩薩も皆悉く我身中に在す。故に遠く極樂世界に行かず、この土にありながら、極樂に生まれたりといえども、真如の理を知らざれば、我身弥陀如来と其体不二也と知らざれば、かいなし」(筆者補注『恵心僧都全集』一・四九五)といっているが、

すなわち「西方極樂淨土の教主阿弥陀仏をはじめ、觀音・勢至両菩薩等の極樂の聖衆は、実はすべてわが身の中にいらっしゃる。であるから、遠く西方十万億の仏土を隔てた極樂淨土になど往生せずとも、この足下の娑婆世界にいながら、実はすでに極樂淨土に生まれているのであつて、そうした真実の道理を知らず、わが身と阿弥陀仏とが実は同体不二であることを知らないのは、何とも残念なことである」というのです。

これらは我れら衆生を無始本覺の如来となし、我れらは本来三身の徳を具足し、常に妙法心蓮台に住しつゝあるも、この理を知らざるが故に生死に流転するのであるから、もし今円頓至極の法を聞き、九界妄想の夢ひとたび醒むれば、即時に無始の極仏が現成するとし、しかしてまた極樂に生ぜんことを求むるものも自身即仏の理を知り、我身すなわち弥陀如来と同体無二なることを知れば、この土に居ながら極樂に生まれることができるというのであつて、幸西らの義立がこれに基づいたものであることは明らかとすべきである。

すなわち、これら『觀心略要集』『菩提集』『真如觀』の説示によれば、我々はもとと仏であつて、とりたてて難しい行を修めずとも、もともと法身・報身・応身の仏徳を具え、

いかなる時も常に蓮台に住しており、我々が迷っているのは、そうした道理に気付いていないだけだということです。そして、その真実の道理に気付きさえすれば、地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天・声聞・縁覚・菩薩という九界に結びつける妄想から一瞬に解き放たれて、そのまま仏であることが体得されるのであり、わが身が阿弥陀仏であり、この世は極楽浄土に他ならないということです。

いかがでしょうか。今でこそ、仮託された可能性が広く指摘されているとはいえ、『往生要集』において説かれていた厭離穢土・欣求浄土という世界観とは一八〇度異なる世界観を、他ならぬ源信自身が唱えていたという驚くべき事実が次々と浮かび上がってくるのです。当時の仏教界を席捲していた本覚思想の物の見方、そして、その思想に基づく阿弥陀仏や極楽浄土の理解は、善導大師や法然上人の説示された阿弥陀仏や極楽浄土の理解と大きくかけ離れたものであり、だからこそ、法然上人が「偏依善導一師」と宣言された背景を如実に知ることができるのです。そして望月先生は、一念義の幸西上人や西山義の証空上人と共に親鸞聖人も、こうした本覚思想を強く受けたお方であると指摘されたのです。

（続く）

名 和 清 隆

桶川飛行学校のこと

夕焼小焼の赤とんぼ負われて見たのはいつの日か
山の畑の桑の実を小籠に摘んだはまぼろしか
十五で姐やは嫁に行きお里のたよりも絶えはてた
夕焼小焼の赤とんぼとまっているよ竿の先

(童謡『赤とんぼ』三木露風・詩／山田耕筰・曲)



微

風

吹

動

とんぼは、日本人に非常に馴染が深い昆虫である。季語としては秋であるが、夏から秋のお馴染の昆虫であることからお盆との関連も多く見られ、お盆の時期のとんぼは精霊の姿、または精霊を送迎するものとする伝承が全国で見られる。京都府北部では7月1日を「トシボ朔日」と呼び、地獄の釜のふたが開きとんぼが生まれる日だといひ、岡山県ではこの時期のとんぼを「盆とんぼ」と呼び、とんぼを採るとお盆が来ないという言い伝えがあったという。

また、素早くあちこちを飛び回り、また前にしか進まないことから、「不退転」の精神を表すとして武士の間では「勝ち虫」と縁起物として扱われ、兜や陣羽織などの装飾にそのデザインが用いられたのである。（しかし、このとんぼの「行ったり来たりする」習性は実は恋愛相手を探すためだそうで、武士の理解との乖離を思うと、思わず笑みが漏れてしまうが。）

さて、話は大きく変わるが、私の住む埼玉県桶川市の荒川河川敷には、ホンダエアポートという飛行場がある。ここではセスナ機や飛行船の離発着、また小型機による遊覧飛行やスカイダイビングを楽しむことができ、休日ともなれば、遥か上空から舞い降り、ゆつたりと空を散歩するスカイダイバーの姿を見ることができ。

このように現在では、人々の憩いの場となっているが、実はこの

飛行場には悲しい歴史がある。第2次世界大戦が激しさを増す頃、ここは熊谷陸軍飛行学校桶川分教場（通称…桶川飛行学校）であり、少年飛行兵や学徒出陣の特別操縦見習い士官など、延べ1,500、1,600人の航空兵の教育が行われた。戦争末期には、特別攻撃隊の訓練場となり、昭和20年4月には特攻隊員12人が鹿児島県の知覧特攻基地へ送り出された悲しみの場所でもあった。ここで用いられていた訓練機は、赤い機体であったことから通称「赤とんぼ」。この赤とんぼに乗り、敵戦艦に見立て立てられた地上の旗に向けて、突撃の為の急降下訓練を繰り返していたという。

ここで分隊長として飛行兵の教育や訓練を行っていた、伍井芳夫中佐（享年32歳）という人物がいる。彼はこの分教場で多くの飛行兵を教育し、そして戦地へと送り出した。後に彼自身、戦局が厳しさを増した昭和20年1月に結成された第23振武隊（特攻隊）の隊長に任命されることになる。そして昭和20年3月27日、突撃準備のため栃木県の壬生飛行場から、特攻の基地である鹿児島県知覧を目指して飛び立った。その途中、埼玉の上空を通過していったが、前もって通過時刻を知らされておいた家族や近所の人々の上空で、2回旋回してから翼を振り西の空へと飛んで行ったという。

この伍井中佐は自坊の檀信徒であるため、私は小さい頃からお盆

の棚経で彼のためにお経を唱えてきた。戦争を知らない私は、飯井中佐を通じて戦争に触れてきたといえる。教科書を通じて学んだだけでは、少なくとも私には戦争が「過去の歴史」としてしか感じられなかったであろう。しかし、私は地元にある桶川飛行学校の存在、そして特攻を遂げた檀信徒の最期のエピソード、現在でも彼に祈りを捧げる遺族の姿、そしてその祈りに私自身が関わるといふ体験を通して、戦争が過去の出来事ではなく、現在に連なる出来事として感じる事が出来た気がするのである。

勇ましさを象徴であるとなほ。愛しい存在を思い、羽を振るとなほ。国への思い、愛する家族への未練、様々な感情を背負い、でも本当の思いは胸に無理やりしまい込みながら敵艦に突撃した「となほ」。そして、死者の精霊を（思いを）生者へと届けるとなほ。

となほの飛ぶ時期にあたるお盆は、身近な先祖へと思いを向ける機会である。それとともに終戦の時期と重なることから、地域の死者を思い、国家の死者を思うことにより、私たちの大切な過去へと触れ現在へと結ぶ機会でもあるだろう。

もうすぐお盆がやってくる。

小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

前田和男

第九十九回

第三部

充実と稔りの白秋へ

違法自治、芝中学校第三代校長として その2



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校（現芝中・高校）、同本校（現・大正大）へ進学を許され、明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として仏教再生の興望を担い、印度学の拠点ドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍らキリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。留学四年目、バーゼルの万国宗教歴史学会で研究発表、仏教に造詣が深いオーストリアル・ハンガリー帝国元駐日代理公使クーデンホーフ伯と出会う。またヨーロッパ初の比丘ニャーナティロカルの存在を知って強い興味を覚える。一方盟友・荻原雲来が博士号を取得して帰国、残された海旭は母トナと導きの師・海定逝去の悲報に耐えながら博士号を取得するも宗門から給付金を打ち切られる。東大教授・姉崎正治の仲介で富豪カーンに援助を求めるが断られ万策尽きたところへドイツ駐節大使の珍田捨己から援助の手が差し伸べられ、悩んだ末に相思のドイツ女性の勧めを受け入れ、シベリア鉄道で帰国の途へ。途次奉天で新仏教運動で知り合った満蒙の外交官・北条大洋と再会、大アジア主義に共感。十一年ぶりに祖国の土を踏むと「大逆事件」に遭遇。今後の身の処し方を思索するなか高島米峰の依頼で「新仏教」に創作童話「釣龍鯨」を発表。留学時代から温めていた細民支援の「浄土宗労働共済会」を立ち上げるいっぽう、五年前に宗門以外からも生徒を入学させることにし、なり名称を芝中学と改めた母校の第三代校長に就任する。

山本五十六の教育論の上を行く海旭の「遵法自治」

いまなお上策の人材育成の教育方法論として、しばしば引き合いに出されるのが、海軍元帥・山本五十六が遺したとされる、以下の語録である。

「やってみせ、言ってみせてさせてみて、ほめてやらねば人は動かじ」

たしかに上策であるが、渡辺海旭の「教育方法論」は、さらにその上をいく「上の上策」であった。すなわち――

「何もしてみせず、じつと見守るだけで、ひたすら考えさせる。そして、ことさらにほめもしない。その結果、生徒たちが自分自身で考え、おのずからしるべき事をなすところへと導く」

これこそが海旭が芝中学の校訓として唱えた「遵法自治」の精髓であり、前回紹介した、不審火で焼失したグランドピアノの寄贈を生徒たちが自発的に行なった「顛末記」がその結実事例であった。

この「遵法自治」という自助自発の人づくりについて、もう一つ興味深い事例をご紹介します。

時は昭和に入ってからのことである。

当時芝中生泣かせだったのは、朝の「検問」だった。

門前にはコワモテの生徒監が、これまたいかつい門衛を従えて、腕組みをして睨みをきかせているからである。

生徒監は石腸（いしわた）千代松。詰襟を一部の隙もなく着込み、巨大なカイゼルヒゲをたくわえたその姿に、生徒たちは猛禽類の「ワシ」のあだ名をたてまつって大いに恐れおののいた。それに従う門衛は岩田為吉とい



生徒たちに「ワシ」の綽名で恐れられた生徒監・石腸千代松

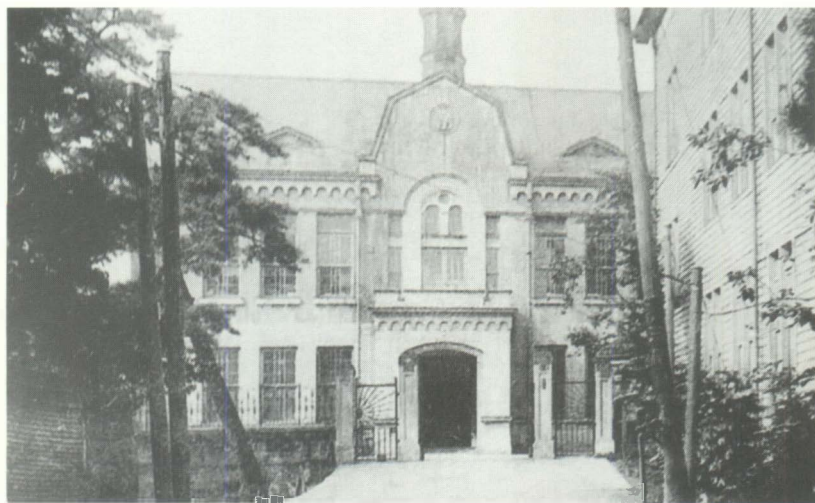
い、すぐる日露戦争における旅順港攻略の折り、野砲兵として上官を救助した功で金鶏勲章七級を受けた猛者であった。

登校時間になると門衛・岩田のラッパが高らかに鳴りひびく。その音は遠く神谷町まで聞こえたという。生徒たちはそれが鳴り終るまでに、なんとしても正門を潜りぬけなければならぬ。非情にもラッパが鳴り終わったら、正門で待ち構える生徒監の「ワシ」と門衛のラッパ手に生徒手帳を取り上げられる。これが三回つづくと、「操行」（修身・道徳）

の評価が「丙」となり、他の科目の点数によっては、へたをしたら落第。おまけに父兄が呼び出されて「指導」を受けることになる。

しかし、これは教育方法論からすると、叱って躰ける「下の策」であり、海旭の「遵法自治」とは相いれない。この「矛盾」はいったいどうしたことか。

実は、海旭も、「門限」から三分間だけみずから正門に立つのである。そして、駆け足で校門を指したもののラッパが止んだとたんにつかりして足をとめてしまった生徒に「あきらめるな」といわんばかりに手招きをする、そして再び走りだした生徒を遅刻したからといってとがめることはしない。よしよしと頷くだけである。生徒監の「ワシ」もラッパ手の門衛も、校長先生が叱らないものだから、生徒を叱責するわけにもいかず、本来なら取り上げるべき生徒手帳も取り上げない。こうして「門限」から三分間だけは、遅刻者は「免責」されるのである。



大正五年に不審火で校舎が全焼、翌年再建された芝中学の正門。ここで毎朝、生徒監「ワシ」と海旭校長が並んで生徒を待ち受けた。

すると、不思議なことに、その生徒たちは二度と遅刻はしなかったという。

これは筆者の想像だが、そもそもこのコワモテの生徒監、「ワシ」こと石腸千代松をリクルートしたのは海旭ではない。生徒監の「ワシ」は、東京府立一中、現在の日比谷高校の前身で、当時は日本で一番の中学校の生徒監だった。それを引き抜いたのは宗門当局で、それで公立の雄、府立一中に追いつこうというのが狙いだった。実はそれには海旭は内心反対だったが、コワモテ生徒監は「使いようだ」と思ったのではないだろうか。

すなわち、「叱って躰ける」生徒監に対して、横で「だまつて見守る」校長。このコントラストによって「遵法自治」のなんたるかを問わず語りに生徒たちに染み入らせることができるのではないかと。それが「三分間猶予作戦」であった。

となると、海旭の「遵法自治」とは相当な高等戦術だったことになる。

いずれにせよ、海旭は、およそ「躰けるために叱る」という「下の策」をとることは生涯なかった。

ある生徒がちよつとした出来心から校内のパン屋の商品をくすねたことがあった。これが発覚して校長の海旭に呼び出された。当人は退学を覚悟したが、海旭は、反省しきりの生徒を赦すと、出来心とはいえ「私の指導の至らなさだ」と自らを責めたという。

また、厳冬期に暖をとろうとやんちゃ連が、植木鉢を火鉢がわりにして、教室の床をこがして穴をあけてしまった。やんちゃ連は退学はまぬがれないと意気消沈していたところ、やってきた海旭は、

「危ないからこういうことは止めなさい」と注意しただけで去っていった。

しかし、海旭が、たった一度だけ怒りを爆発させたことがあった。

ある時カンニングが流行った。それを知った海旭は全生徒を講堂に集めて、こう痛嘆し

た。

「純真なるべき学生が、この破廉恥を良いと思っているのか！ わからなければ天に問え！ 天帝に問い奉れ」

海旭が生徒を面罵したのはそれが最初にして最後だった。

しかもその「後始末」がまた海旭らしかった。首謀者を処分することなく、首謀者の父親を呼んで、「あなたの子供にこんなことをさせて校長としてまことに申し訳ない」と涙にむせびながら詫びたというのである。

そんな海旭だから、二十二年にわたる校長在任中、いくら成績が悪かろうと、やんちゃをしようと、退学にされた生徒は一人もいなかった。

中には、親が破産をして学費が払えず学業を断念せざるを得ない生徒もいたが、学費を免除するだけでなく、ひそかに生活の支援をしていたというから、みずから唱えた「遵法自治」の体現ぶりはなんとも徹底していた。

社会奉仕活動が

やがて大きな成果を上げる

しかし、横で生徒たちをひたすら見守るといっても、海旭の「遵法自治」は、生徒の自発をただじっと待つだけの、単なる放任主義ではなかった。

実は、裏で、生徒たちが自分自身で考えて事をなすための環境整備を周到に用意していた。前回紹介した音楽教師の島田英雄のような優れた教師のリクルートもそうだが、もうひとつは、いまでいうボランティア、社会奉仕活動であった。

海旭は芝の校長に就任すると、生徒たちに呼びかけて、慈善活動サークル、「Shib a Social Service Club」、略称3Sクラブを立ち上げる。

歳末になると街頭募金を行なつて、集めた浄財で餅を購入し、年を越すのが困難な貧窮家庭に配られるという活動を毎年つづけたの

である。なお、これは青少年による年末助け合い運動の嚆矢とされる。

こうした地道な活動が、大正十二年に首都圏を襲って甚大な被害をもたらしした関東大震災で大きな成果を挙げたのである。

芝中学は運よく被災をまぬがれたが、生徒たちに臨時登校を促したところ、およそ三分の一が罹災していることが判明。そこで無事だった生徒有志に「慰問隊」をつのつたところ大勢が自主的に参加、海旭は生徒たちとともに、順次罹災生徒の家庭を訪問して情報を収集、宗務当局に当面四か月分の月謝の扶助を要請し、当局もこれを諒として実施されたのである。

さらに、芝中の全校舎を近隣の罹災者に開放。また、近くの浜離宮にはバラックが建てられ多くの被災者が避難していたが、その児童らを招いて、講堂で慰安大会を開催。これにも生徒たちが自主的に協力を申し出た。

また、次のようなほほえましいエピソード

が、惨状に鬱屈するばかりの近隣被災者たちが大いになごませた。

芝区（現在の港区は当時芝区、麻布区、赤坂区の三区からなっていた）の小学校八校上級生のために大講堂を提供、音楽の授業を芝中学の一・二年生と合同で受けることになったのだが、「トみんなかわいい小鳥になって……」という黄色い声の合唱に声変わりのながら声が唱和。当初芝中生たちはこれを恥ずかしがった。

ところが父兄や区民たちから、

「さすがは増上寺さんの元学寮だけのことはある、立派なものだ」

と称賛をされるうちに、自分たちの行為の意義を自覚するようになった。

これぞ海旭が提唱した芝中学の校訓「遵法自治」の具現化であった。（つづく）

さっちゃんねネ

かまち♡ひろう



暑中お見舞い申し上げます

令和元年

浄土宗 本山知恩院門跡
浄土門主 総

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山 百萬遍知恩寺
法主

福原隆善

〒606-8225 京都 市左京 区田中門前町一〇三

高橋弘次

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山 清浄華院

大本山光明寺
法主

柴田哲彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七 (一一) 〇六〇三

大本山善光寺大本
法主

鷹司誓玉

〒380-0851 長野市元善町五〇〇

願

暑中お見舞い申し上げます

令和元年

浄土宗務総長

豊岡 鐸 尔

法然上人御誕生地
浄土宗特別寺院

美作
誕生寺

〒709-3602 岡山県久米郡久米南町里方八〇八
TEL (七二八) 二二〇二
FAX (七二八) 二二六二

(学)大乘淑徳学園
理事長

長谷川 匡 俊

〒174-8645 東京都 板橋区前野町五・五・二

学校法人 淑徳学園
淑徳S.C中等部高等部

理事長
校長
麻生 諦 善

白本尊阿弥陀如来・
家康公念持佛

静岡
宝台院

住職 野上智徳

赤坂六地藏尊

浄土寺

住職 阿川正貫

〒107-0052 東京都港区赤坂四・三・五

鶏頭山安楽寺

飯田 實 雄

〒399-4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
〇二六五(八三)一三六〇

清水湊

忠高山
實相寺

〒112-0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番七号

無量山
傳通院

電話〇三(三八一四)三七〇一(代表)

家康公祖母菩提所

玉桂山
華陽院

住職 堀田卓文

勝 願 寺

〒365-0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三
電 〇四八(五四一)〇二二七

お骨仏の寺

一心寺

〒543-0062 大阪市天王寺区達阪二・八・六九
〇六(六七七二)〇四四四

暑中お見舞い申し上げます
令和元年

九品阿彌陀如来

浄眞寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

投込寺 浄閑寺

戸松秀明

〒116-0003 荒川区南千住二・一・二二

寿福山 寛慶寺

水科善隆

〒380-0852 長野県長野市東之門町四〇六番地
電話〇二六(二三二)一八一二

宮城県仙台市

定義如来 西方寺

住職 大江田 紘義
前住職 大江田 博導

古今伝授の寺

天主君山 願成寺

〒411-0022 静岡県三島市川原ヶ谷十八
住職 魚尾 孝久
メールマガジン ganjo@ganjo.or.jp

大吉寺住職

成田昌憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四・七・九

岩淵

天主山 正光寺

〒115-0041 東京都北区岩淵町三十二・十一

塩竈市 雲上寺

東海林良雲

梅窓院 住職

中島真成

東京都港区南青山 2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ <http://www.baisouin.or.jp>

無縁寺

回向院

〒130-0066 東京都墨田区両国一・八・十
電話〇三(二六三四)七七七六

五劫山

愚鈍院

〒984-0061 仙台市若林区新寺三・十二・十七



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」
住職 飯島英徳

北海道室蘭市
満岡寺・善行寺
(0143) 22・4677・44・2695

暑中お見舞い申し上げます

令和元年

浄土宗東京教区
教区長

高橋誠実

無量寺
〒158-0097 世田谷区用賀四・二一・一

浄土宗東京教区教化団団長
浄心寺住職

佐藤雅彦

〒113-0023 文京区向丘二・一七・四

鎌倉大仏殿

高德院

〒248-0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話〇四六七(二二)〇七〇三
FAX〇四六七(二二)五〇五一

浄土宗議會議員
埼玉県佛教会副会長

蓮馨寺

住職 象原恒久
〒350-0066 川越市連雀町七・一
電話〇四九(二二二)〇〇四三
FAX〇四九(二二六)〇六七六
教区

京

浄土宗東京教区教区議會
議長

村山好信

良信院
〒135-0022 江東区三好二・七・五

願行寺

佐藤久雄

〒140-0004 品川区南品川二・一・二二

光円寺住職

佐藤良純

〒112-0002 文京区小石川四・二二・八

森巖寺

加藤昌康

〒155-0002 世田谷区代沢三・二七・一

編集後記

盂蘭盆に西の方から風が吹く

岱潤

六月九日、朝勤に合わせ藤井正雄先生の一周忌の供養をさせて頂いた。先生は常に現代社会を見ながら発言された先生でした。今号では巻頭に先生が二十三年前に書かれたお盆の玉稿を掲載し、先生を偲びたいと思います。

ところでお盆の多くの施本では今でも、その名称「うらばん」の言葉の起源を「ウランバナ」逆さに吊される苦しみが記載されている。どんなに権威ある先生が言ったこととはいえ、他説、例えば「ウルバン」(先祖供養)が出て、その方が適切なら、それも紹介すべきではない

かとかねがね思っている。

先日鈴木隆泰先生の講演録を読んでいたら、お釈迦様の言葉で衡撃的な、「僧侶は葬儀に関わってはならない」は誤訳であるということが書かれていた。先生はここで訳した「葬儀」の言葉は、供養ではなく、「納棺し、茶毘に付し、遺骨塔建立に至る遺体処置の手続きだ」と解釈されている。そしてお釈迦様も仲間の僧侶の葬儀を行っている事実をあげている。我々僧侶にとっては誠に心強い言葉で、うれしくなりました。

権威ある先生の訳であると、それが絶対であり正しいものであるとする思い込みがはたらき、間違いを正そうとはしない

雑誌『浄土』

特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
 麻谷勝正(日黒・祐天寺)
 魚尾孝久(三島・願成寺)
 大江田博導(仙台・西方寺)
 加藤昌康(下北沢・森厳寺)
 桑原恒久(川越・蓮馨寺)
 桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
 佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
 佐藤久雄(品川・願行寺)
 佐藤良純(小石川・光園寺)
 東海林良雲(塩釜・雲上寺)
 河本悠大(両館・称名寺)
 高口恭典(大阪・一心寺)
 中島真成(青山・梅窓院)
 中村康雅(清水・実相寺)
 中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
 成田昌憲(世田谷・大吉寺)
 野上智徳(静岡・宝台院)
 藤田得三(鴻巣・勝願寺)
 堀田卓文(静岡・華陽院)
 本多義敬(両国・回向院)
 松濤泰彦(芝・寶松院)
 真野龍海(芝・天光院)
 水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodo.ne.jp/>

メールアドレス hounen@jodo.ne.jp

くなってしまう。人権学習の上でも、多くの人が言っている、昔から言っていることが正しいと思ひ込んでしまうことが、もっとも怖いことであるとしている。それを気づかせてくれる話だ。(長)

編集チーフ
 編集スタッフ

長谷川岱潤
 斎藤晃道
 佐山哲郎
 青木照憲
 村田洋一

浄土

八十五巻七 八月号 頒価六百円
 年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 令和元年六月二十日

発行 令和元年七月一日

発行人

佐藤良純

編集人

加藤昌康

印刷所

株式会社 晩印刷

〒一〇五〇〇一一

東京都港区赤坂四丁目明照会館四階

発行所

法然上人鑽仰会

電話

〇三(二五七八)六九四七

FAX

〇三(二五七八)七〇三六

振替

〇〇一八〇・八・八二八七

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

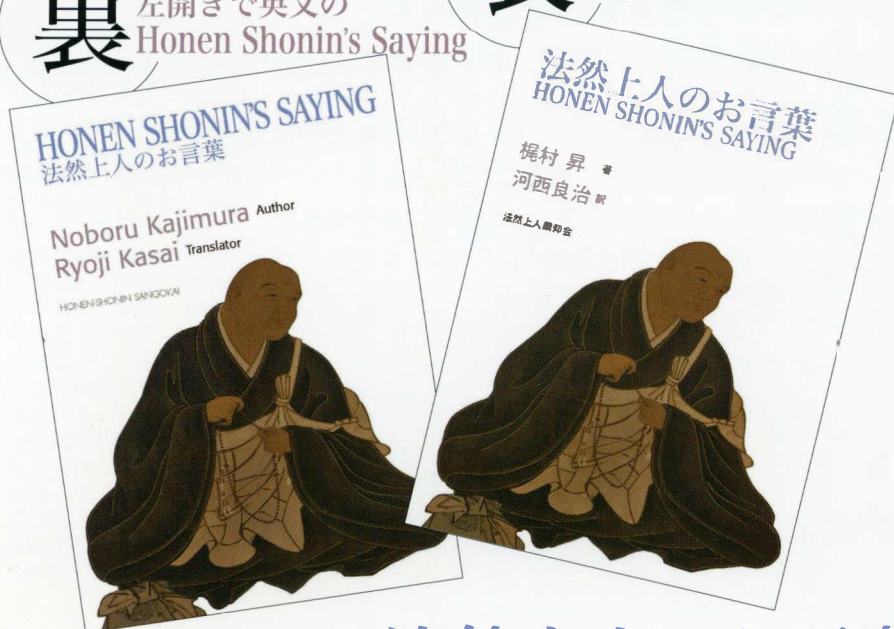
※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

裏 左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表 右開きで和文の
ご法語



和英対応**法然上人のお言葉**

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人讃仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人讃仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。